

『神道集』卷三「稲荷大明神事」における表現をめぐって

—ダキニ天信仰の受容を中心に—

有賀夏紀

論文要旨

本稿は、『神道集』卷三「稲荷大明神事」におけるダキニ天信仰の考察をとおして、本書の儀礼テキストとしての側面を論じるものである。本文を検討した結果、つぎのような特徴が明らかになった。まず、本章段は密教の修法であるダキニ法の思想を取り込み、それを対句表現などの修辞を用いて構成していること。その際、中心の辰狐王菩薩と圍繞する眷属たちの尊容を列記することで、儀礼の本尊圖像を連想させるような叙述になっていること。さらに、現世の利益とともに後生の救済を強調していることの三点である。これら修辞がどここされた叙述は、表白や願文に通じるものであり、辰狐王菩薩と眷属たちの描写は、本尊圖像の前に読み上げられるといつそう効果的である。また、後生守護の功德は、法会の場で聴衆をよく惹きつけるものとなる。このように、本章段はダキニ天信仰の要素を、仏事法会の場の言辭としてふさわしいかたちで享受しているのである。

キーワード『神道集』、辰狐王菩薩、稲荷信仰、ダキニ法、儀礼テキスト

はじめに

神仏習合思想のもとに本地垂迹説が隆盛した中世は、神と仏が大きく変貌した時代でもあった。本地垂迹説は、仏菩薩(本地)が衆生を救済するために、かりに神(垂迹)の姿となつてあらわれたとする論理である。これによつて平安末期には、諸社の神々に具体的な本地仏が定められるようになり、中世にはその理論化・体系化がすすめられた。こうした運動のなかで、本地垂迹説を物語として語り、神々の本地をあかしたのが、南北朝期に成立したとされる『神道集』である。

『神道集』は、神々の前生譚や中世神道説など、神祇にまつわる十卷五十編をおさめた縁起集である。本書の詞章が、人々を教化するための「唱導」の言説としての性質を持つことは、つとに指摘されている^{〔1〕}。拙稿でも、これまで『神道集』の本文が、仏事法会の際に読み上げられる表白や願文などといった儀礼の場のテキストに類するものであることを、各章段の本地説から考察してきた^{〔2〕}。

本稿で着目するのは、『神道集』卷三「稲荷大明神事」である。稲荷神はもともと農耕神であったが、平安時代に東寺の鎮守となつて、仏教の夜叉である「ダキニ天」³と習合し、多彩な変容をとげた。本章段も、この神仏習合思想にいろいろとられた稲荷信仰に立脚しており、ダキニ天を本尊とする密教の修法「ダキニ法」の思想をとり込んで成立したものと考えられる。そこで本稿では、本章段における稲荷信仰の様相を明確にしたうえで、その叙述方法を確認し、宗教文芸としての『神道集』の性格を検討していきたい。

一、稲荷神の本地説

『神道集』「稲荷大明神事」の冒頭では、稲荷神の本地仏をつぎのように説いている。

抑稲荷明神者、上御前千手、中御前地藏、下御前如意輪観音也。
或人日記、下御前如意輪、中御前千手、上御前命婦辰狐也。本地文殊⁴也。

ここでは、伏見稲荷の上・中・下社のそれぞれの本地を「千手」「地藏」「如意輪観音」と述べたあとに、「或人ノ日記」に見えるもう一つの説として、下御前は「如意輪」、中御前は「千手」、上御前は「命婦ニシテ辰狐」の「文殊」菩薩だとしている。

中世において、稲荷神の本地仏としてよく知られていたのが、観世音菩薩である。はやい例では、大江匡房の『本朝神仙伝』に稲荷神の夢告として、「本体観世音、常在補陀洛、為度衆生故、示現大明神」と、その本体が観世音菩薩であることを示す偈が記されており、十一世紀にはすでに稲荷の観音本地説が確認できる。⁵

後世になると、上・中・下社のそれぞれに該当する観世音菩薩が、より詳しく説かれるようになった。たとえば、南北朝中期以前の成立とされる『稲荷大明神流記』には、上御前は十一面観音、中御前は千手観音、下御前は如意輪観音だと見えている。これと同様の説が、『稲荷明神講式』『溪嵐拾葉集』『諸神本懐集』『類聚既驗抄』『二十二社并本地』などの諸書に散見されることから、十三、十四世紀ごろには、稲荷神の本地仏は観音菩薩であると広く考えられていたことがわかる。⁶

『神道集』でも稲荷大明神の本地として、千手観音、如意輪観音などが名を連ねていた。しかし、ここで注目すべきは、「或人ノ日記」に見える説として、上御前を「命婦ニシテ辰狐⁷」とし、その本地を「文殊菩薩⁸」としている点である。「辰狐」とは、稲荷信仰を介して狐霊と習合した仏教の夜叉、ダキニ天のことである。ダキニ天は、胎蔵界曼荼羅の最外院に位置づけられる夜叉で、『大日経疏』によれば、六ヶ月前に人の死を予見し、その心臓を喰うという。『神道集』では、稲荷大明神の本地として、この「辰狐」と「文殊菩薩」を中心にとりあげていくのである。

平安末期以降、稲荷神はダキニ天との習合によって新たな神格を獲得し、陰陽道や民間巫覡にまでひろがる多彩な宗教世界を形成していった。⁹⁾ 稲荷神とダキニ天が結合した神格は「辰狐王菩薩」と呼ばれ、その本地仏は「文殊菩薩」とされた。そしてこの本迹関係を説いていたのが、密教の強力な修法、ダキニ法に関する聖教類だった。こうした聖教類の内容と、『神道集』「稲荷大明神事」の内容とを比較してみれば、本章段が文殊本地説を軸にするダキニ法の秘説世界に連なることがうかがえるのである。以下、『神道集』本文に即して、その様相を具体的に見ていきたい。

二、辰狐王と文殊菩薩（一）外用の徳

まずは、『神道集』「稲荷大明神事」の内容を、便宜的に分けておく。

- ① 稲荷明神の本地説（上・中・下社）
- ② 十九種の靈験
- ③ 辰狐王菩薩の形象と靈験
- ④ 四大王子（天女子・赤女子・黒女子・帝釈子）の形象と靈験
- ⑤ 八大童子の靈験
- ⑥ 式神（須叟馳走・頓遊行）の靈験
- ⑦ 後生守護の本地（文殊菩薩）

冒頭部は、先ほどとり上げた稲荷明神の本地説①である。つづいて稲荷神の「外用の徳」として、現世利益的な十九種の靈験②が説かれる。それから「内証の功」として、辰狐王菩薩と眷属たちの形象や靈験③④⑤が具陳されていく。そして最後に、後生守護の本地⑦としてふたたび文殊菩薩の功德が述べられている。

ダキニ天の本地を文殊菩薩とする説は、たとえば『溪嵐拾葉集』巻三十九「吒枳尼天秘決」に「大聖文殊ノ化現」と明記されるなど、密教文献のなかでしばしば目にできるのだが、ここでは称名寺蔵・金沢文庫保管のダキニ法に関する次第書に着目したい。

ダキニ法は、おもに現世の願いをかなえるための秘術とされ、天皇の即位灌頂にも用いられた強力なものである。しかし、即座に効力を発揮する効果絶大な修法である反面、狐という畜類を本尊とするために、一歩まちがえれば外法ともなる危険性をはらむ両義的なものでもあった。¹⁰⁾ 称名寺にはダキニ法にまつわる聖教類がまとまって残されており、榑田良洪氏によって言及されて以来、たびたびとり上げられてきた。¹¹⁾ 近年、西岡芳文氏によって一堂に紹介されたが、その多くは陰陽道の式盤をとりいれた盤法にかかわるものである。¹²⁾

ダキニ法が「最極秘密」なる秘法であったためか、称名寺の聖教は伝来をつまびらかにしないが、それらは称名寺二世鉦阿（一二六三〜一三三八）と秀範によって書写されたものが多い。本稿で引用するダキニ法の次第書『頓成悉地法事（付相承事）』と『頓成悉地法大事等』も、外題は鉦阿、本文は秀範の手によっている。これらの聖教

類を手がかりに、まずは『神道集』の土壌となつたダキニ天信仰の世界を明らかにしたい。『頓成悉地法事(付相承事)』の記事から、ダキニ法の性質と、文殊菩薩との関係について見ていこう。

已上四ヶノ法ハ、頓成ノ秘術也。其ノ中ニ頓力中ノ頓ハ、是盤法ノ灌頂ナリ。(中略)五濁悪世ハ、衆生濁故ニ一切衆生ノ福分薄ク成ル。故ニ大日如来ノ等流法身ヲ現シ、文殊ノ智徳ヲ顕シテ、此ノ天尊ト化シタマヘルナリ。¹⁴⁾

ここでは、式盤を使用するダキニ法(「盤法」)がすみやかに靈験をあらわす秘術であること、そして本尊のダキニ天は、「福分」のうすい悪世の衆生を救うために、大日如来が「等流法身」を現じ、文殊菩薩の「智徳」を顕して化現した姿であることが説かれている。¹⁵⁾

ダキニ天は、『溪風拾葉集』巻一〇五に、「吒天名¹⁶⁾真陀摩尼珠¹⁷⁾。欲界衆生貪欲強盛也。仍手持¹⁸⁾摩尼珠¹⁹⁾、雨²⁰⁾万宝²¹⁾施²²⁾衆生²³⁾給也」とあるように、手にした宝珠で衆生に「万宝」をほどこすとされていた。『頓成悉地法大事等』では、このダキニ天の宝珠はとくに「官爵」「福録」「寿命」の「三事」をあたえるといい、これらことからダキニ法が官位や富にまつわる願いに絶大な靈験を發揮すること、そしてそれは本地文殊の智徳の発露だとされていたことが理解できる。稲荷神も、平安期には男女和合の神として信仰されており、¹⁶⁾ 中世におけるダキニ天¹⁷⁾ 稲荷神は、官位や富、愛法といった現世における願

をつかさどっていたことが知られる。

こうした性質は、『神道集』『稲荷大明神事』にも色濃く反映されている。構成②「十九種の靈験」では、辰狐王菩薩が外にあらわす働きである「外用の徳」として、以下のような靈験が掲げられている。

先外用徳者、一者諸病除¹⁸⁾、二者令得¹⁹⁾福德²⁰⁾、三者令得²¹⁾愛敬²²⁾、四者主君令²³⁾重敬²⁴⁾、五者盛家成²⁵⁾、資財具足²⁶⁾。六者五穀令²⁷⁾豊饒²⁸⁾、七者衣裝豊²⁹⁾。八者牛馬六畜成就³⁰⁾。九者所從眷属満足³¹⁾。十者端正³²⁾子生³³⁾、十一者衆人愛敬³⁴⁾子生³⁵⁾、十二者利根自在³⁶⁾子生³⁷⁾、十三者持念³⁸⁾輩病家行向³⁹⁾、忽然⁴⁰⁾病鬼退出⁴¹⁾。十四者持念⁴²⁾輩位共難産⁴³⁾所行向⁴⁴⁾諸魔縁払⁴⁵⁾、安穩⁴⁶⁾令⁴⁷⁾産⁴⁸⁾、十五者盜賊之難除⁴⁹⁾、十六者本姓劣⁵⁰⁾捨⁵¹⁾高位⁵²⁾昇⁵³⁾。十七者軍陣所至⁵⁴⁾、忽然⁵⁵⁾怨軍逃去⁵⁶⁾、十八者呪咀本人返⁵⁷⁾。十九者一切靈験自在⁵⁸⁾。云々。此如十九種⁵⁹⁾一切靈験⁶⁰⁾、何一切衆生⁶¹⁾願非⁶²⁾。皆是我等依怙⁶³⁾、只是天等利益也⁶⁴⁾。

ここでは、もろもろの病気を除く、福德や愛敬を得る、主君から重用される、家が榮えて資財や衣服が豊かになる、うつくしい子供を産む、安産になる、盗難を除く、素性が劣つていても高位にのぼる、呪咀を返すなどの靈験が、十九種類列挙されている。これらはまさに『頓成悉地法大事等』とおなじく、寿命、福録、官位にまつわる願いであり、こうした願いを叶えるために衆生の頼むべきところ(「依怙」)は、みな辰狐王菩薩の利益なのだと言っている。このよう

に、ダキニ天信仰の大きな特徴である現世利益は、『神道集』でも重要な要素としてとり上げられているのである。

三、辰狐王と文殊菩薩（二）内証の功

さて、辰狐王菩薩が備える「外用の徳」につづいて、構成③「辰狐王菩薩の形象と靈驗」では、内なる悟りの境地である「内証の功」をあらわすものとして、「辰狐王菩薩の像容と功徳が語られていく。

次内証功者、彼所住衆生心精為、是能住穢土荒野。愛種子云、如々不可得阿字、三形云、三々随類如意珠也。能乗云、金色微妙天女形、所乗云、白色殊勝辰狐王。

ここで辰狐王菩薩は、「金色微妙ノ天女」が「白色殊勝ノ辰狐王」に騎乗した姿であると明かされる。そしてこの表象は、つぎのように説明されるのである。

能乗所乘定恵一_レ体法也。性徳修徳定恵不二_レ理也。故法界衆生因果異名、凡夫賢聖迷悟差別也。只金剛実智顕故文殊也。胎蔵真理示故辰狐王菩薩也。白色実色現故赤色也。此則赤白二諦法門、福智円満功徳、顕処自性法身如来、悟所真如実相妙理也。

ここでは「定恵（禪定と智恵）が一体であるという教理を用いて、騎乗する天女（「能乗」と、騎乗される辰狐（「所乗」）が一体であることを明らかにし、さらに辰狐王菩薩と文殊の本迹関係を、金剛界・胎蔵界の両部になぞらえて説いている。この部分では、「能乗所乗」「性徳修徳」「定恵不二」「法界衆生」「凡夫賢聖」「赤白二諦」など、対になる観念を配しながらダキニ天の世界を展開させているのが特徴的だといえよう。

ここで見られる辰狐王菩薩の尊形と解釈は、称名寺の聖教類にも通じるものである。『頓成悉地大事等』では、辰狐王菩薩の姿を、文殊菩薩の像容と重ね合わせ、「騎乗する天女||文殊菩薩」「騎乗される辰狐||文殊が乗る獅子」とみなし、辰狐の体の白さは、文殊の「大智」の徳をあらわすものだという。そして、

辰狐王菩薩ハ文殊ノ所乗ナリ。(中略)天女形ノ姿ハ定門ノ徳ヲ表ス。身色ノ白肉ハ可愛ノ智徳ナリ。其ノ所乗ノ白色ハ本地ノ智徳ヲ表ス。

と、『神道集』同様に、辰狐王菩薩の表象を「定門」と「智徳」という、定恵の概念で解している。

また、『頓成悉地法大事等』では、『神道集』で本迹関係に用いられた金胎の教理を、ダキニ法で使用する三重の式盤(天・地・人盤)にあてはめ、盤法自体を両界曼荼羅になぞらえている。ただし、ここで

は「辰狐王菩薩(天盤) 〓金剛界」「八大童子・四大王子(地盤・人盤) 〓胎藏界」とされているため、『神道集』の「文殊菩薩 〓金剛界」「辰狐王菩薩 〓胎藏界」という認識とはかならずしも一致しない。だが、『頓成悉地法大事等』における金剛界の「智拳印」の解釈のなかで、

法界智ノ義門、中尊ノ功能ニ当レリ。法界体性智ハ、遮那普門ノ徳也。其ノ中ノ智徳ハ、大聖文殊也。彼大聖文殊ニ福智ノ二門アリ。其ノ応用ノ身ハ、即チ此天尊也。(中略)金界ノ智徳ノ応化ノ義門ナリ。

と、「金剛の智徳 〓文殊菩薩」とされていることに留意したい。おそらく『神道集』は『頓成悉地法大事等』と同様の発想から「文殊菩薩 〓金剛界」と理解して、胎藏界曼荼羅に属するダキニ天のことを「胎藏ノ真理」と表現したのであろう。ここで『神道集』が本迹をことさらに金胎にあてはめたのは、「能乗・所乗」「性徳・修徳」「法界・衆生」「凡夫・賢聖」という相対する、しかし不二でもあるものを対句的に重ねていくなかで、おなじように本迹を対置させるためだったと考えられる。

こうした対句的な発想は、仏事法会などの場で読み上げられる表白や願文といった修辞をともなう儀礼のテキストに共通するものである。『神道集』がそうしたテキストとしての性質を持つことはすでに論じているが、ここでもまた辰狐王菩薩の像容や功徳を、修辞的

な表現を用いて叙述しているのである。

四、対句表現と儀礼テキスト

前節で『神道集』「稻荷大明神事」は、諸要素を対置する意識が顕著であることを指摘した。要素を対置するのみならず、本文それ自体も、対句表現を意識したものとなっている。たとえば、辰狐王菩薩の功徳を語る⑦「後生守護の本地」の本文を抜粋して書き下してみると、

(原文)

此法知 故、六道流転。彼理悟 故、四生踰陴。恨哉、夢内悪業作、生死旅宿留事。悲哉、幻生苦果感、輪廻不運居事。歎、歎、悲、悲、今度生死厭、何時仏世期。

(書き下し)

此の法を知らざるが故に、六道に流転す。
彼の理を悟らざるが故に、四生に踰陴す。
恨めしきかな、夢の内に悪業を作りて、生死の旅宿に留る事を。
悲しきかな、幻の生に苦果を感じて、輪廻の不運に居する事を。
歎くべし、歎くべし、
悲しむべし、悲しむべし、
今度生死を厭はずんば、いずれの時か仏世と期すべき。

と、対句を意識しているのがわかる。これにつづく本地の功德も、

(原文)

下無間底臨、順路正法説、上悲想頂至、法界利生授。(中略)衆
生心精奪、究竟最頂送、阿鼻深底際、法界相生授。
(書き下し)

下無間の底に臨みては、順路の正法を説き、

上悲想の頂に至りては、法界の利生を授け給ふ。(中略)

衆生の心精を奪ひては、究竟の最頂に送り、

阿鼻の深底に降りては、法界相生を授け給ふ。

と、上下を対置している。

仏事法会の場の言説は、表白や願文のような詩的修辭を凝らした漢文体のテキストと、説教のような自由な語りくちの言辭とがあることが知られている。前者は儀礼のなかで誦誦されるものであり、後者は草案類をもとに当意即妙に口演されるものであった。『神道集』にはどちらの文体も認められるが、該当部分はこのうち対句の修辭を凝らした、表白や願文に類する叙述形式だと考えられる。¹⁸⁾

『神道集』と成立圏が重なることされる真名本『曾我物語』では、物語中に登場する願書や神明本地などの多くに、『神道集』に収録された縁起群との同文が認められる。¹⁹⁾これは『神道集』で諸社の縁起や本地説を語っている詞章が、真名本『曾我物語』のなかでは、神仏へ

奏上する祈念の言葉として用いられたことを意味する。こうしたことも、『神道集』の本文が、表白や願文といった儀礼のテキストに連なるものであることを想起させるのである。

五、眷属たちと本尊圖像

辰狐王菩薩につづいてとり上げられるのが、四大王子、八大童子、式神などの眷属たち(④)⑥である。²⁰⁾

ここで注意しておきたいのが、『神道集』「稲荷大明神事」において、中心となる辰狐王菩薩と眷属たちが、その尊容を描写されながら、あたかも曼荼羅のように並べられているという点である。これは『神道集』本文が、仏事法会などの儀礼のテキストとしての性質を持つことと深く関わってくる。まずは、本文に書かれている眷属の様子を確認したい。

最初に登場するのが、天女子・赤女子・黒女子・帝釈子の④「四大王子」である。『神道集』やダキニ法の次第書では、この四大王子がそれぞれ手にする持物を、辰狐王菩薩とおなじく、定恵、胎金、理智にあてはめて解釈する。たとえば、「天女子」の持物である「弓箭」は、以下のとおりである。

左手弓取、右手矢取、此則定恵「界弓箭也。(『神道集』)

左右ノ弓箭ハ、仏部ノ徳ヲ表ス。定恵和合シテ、化用ノ速ナル

コトヲ顕ス也。(『頓成悉地大事等』)

ここでは、『神道集』『頓成悉地大事等』ともに、左右の弓箭を定恵の象徴として理解している。また、「赤女子」について『神道集』は、

左手諸愛敬玉奉藏治。右手鉞抱。不会厄難除却。所謂理拳胎藏眞理収、敬愛求願遂、智鉞金剛実智顕、福智成。

と、左手に持つ「愛敬玉」を胎藏の眞理、右手に持つ「智鉞」を金剛の実智として、理智と胎金の概念を用いている。「黒女子」については『頓成悉地大事等』が、

理ノ手ニ彼レヲ拳テ押サヘテ、眞理ニ帰サシメ、智ノ手ニ恵劍ヲ執テ、割断ノ相ヲ表示ス。

とみなしており、こちらもやはり理智にあてはめられている。このように『神道集』やダキニ法の次第書において、四大王子も辰狐王菩薩と同様に、定恵や理智、金胎という対になる觀念によつて意味づけられているのである。

さらに、ここでは辰狐王菩薩を筆頭に、その尊容を描写された眷属たちがつきつきと登場してくることに留意したい。たとえば、南北朝期作とされる「伏見稻荷曼陀羅²²⁾」には、稻荷山を背景に、白い

狐に乗った女神と、それを圍繞する四大王子、八大童子、二人の式神が描かれている。『神道集』が語る辰狐王菩薩と眷属たちの尊形や、本尊をとりかこむように展開されている神々の配置は、こうした本尊図像を連想させるものである。現に、ダキニ法の次第書のなかでは、修法をおこなう者が本尊の道場をイメージする「道場観」のくだりで辰狐王菩薩たちの尊形が記されていることから、こうした描写が修法に必要な図像(イメージ)を喚起する手だてとして機能していたことがうかがえる。『神道集』の本文も、たとえば儀礼の場で本尊図像を前に読誦されたならば、いつそう効果的に響くだろう。「伏見稻荷曼陀羅」などは、そうした本尊図像のひとつだったのかもしれない。

このように『神道集』『稻荷大明神事』は、ダキニ法に関する聖教類や密教資料の思想と通底しており、さらにそれらの要素を対句表現などの修辞を用いて叙述している。かかる表現方法や、図像的な説明をともなう本尊と眷属の列挙は、儀礼の場のテキストとしての性質だと考えられるのである。

六、『神道集』の現世と後生

「稻荷大明神事」の特徴を、もう一点指摘したい。それは、現世利益の側面の強いダキニ天信仰のなかにおいて、後生を強調している点である。『神道集』は、辰狐王菩薩と眷属について縷々述べたのち

に、⑦「後生守護の本地」について熱心に語りはじめる。一部、先に引用した文と重複するが、以下にあげておく。

次又後生守護本地尋、今此稲荷大明神本地、是大聖文殊師利菩薩、久成如来也。垂跡云、吒枳尼明王、等流化身也。濁悪教主也。(中略)夫辰狐王菩薩者、如意珠王菩薩是也。誠是三如意珠財得、十界十如相宛然。四種三昧得、万徳円満相朗也。而此法知故、六道流転、彼理悟、故、四生踰理、恨哉、夢内悪業作、生死旅宿留事、悲哉、幻生苦果感、輪廻不運居事、歎、歎、悲、悲、今度生死厭、何時仏世期。但誓願馮、利益莫太也。(中略)加之自性隠、生死泥土交、随類化現顕、深出理事、逆道衆生利、為、下無間地獄、順路正法説、上悲想頂至、法界利生授、其、故何者、等活地獄体、煩惱断破相也。衆生心精奪、究竟最頂送、阿鼻深底際、法界相生授。(中略)総此明神応用無窮、亦力用無量也云々。

「後生守護」という文脈において、あらためて稲荷大明神の本地が「大聖文殊師利菩薩」であることを確認し、その等流身としてあらわれた垂迹が「吒枳尼明王」であり、「辰狐王菩薩」であり、宝珠でもある「如意珠王菩薩」だと述べている。つづいて、悟りにいたる「法」や「理」があるにもかかわらず、それを知らないせいで「六道二流転」する衆生の悲しみを説き、それをうけた点線部では、本地仏による

济度が強調されている。「利益莫太」な誓願をたてた仏は、衆生救済のために自性をかくして生死の泥にまじわり、自らの姿を相手にあわせてさまざまに変えながら、無間地獄の底から有頂天の高みにまでもむいて、利益をさずけるというのである。

すでに確認したように、ダキニ天は現世利益的な願いをすみやかに成就させる力をもった存在である。『神道集』は、文和・延文年間(一二三二～一二三六)に成立したと考えられているが、同時期の延文四年(一二三九)に、称名寺の経済的復興を祈つて五世什尊が作成したダキニ天の願文⁽²⁵⁾では、「一切道俗男女貴賤上下」のさまざまに願いが、辰狐王菩薩に祈請されている。その内容は、病氣、水火兵盜賊、呪詛や財産にかかわる難をのぞくなどの現世利益が主眼となっており、『神道集』と同時代のダキニ天の願文が、現世利益を目的として作成されていたことが知られる。そうしたダキニ天信仰のなかで、後生の济度をより強調する「稲荷大明神事」は、やはり特徴的だといえよう。

「稲荷大明神事」のほかにも、『神道集』の章段には、本地仏の功德を現世と後生とで並べているものが見られる。たとえば、巻五「日光権現事」では、日光権現の本地を千手観音・阿弥陀如来とあげ、まずは千手観音の現世利益的な功德を「千手経」にもとづいて述べたのちに、阿弥陀仏の名号を唱えることによる济度が説かれる⁽²⁶⁾。

また、巻三「春日大明神事」は、一宮から四宮までの本地をそれぞれ不空羅索観音・薬師如来・十一面観音・地藏菩薩の順に列記するが、

とくに二宮の薬師如来の誓願は家財や食料に関するもので、現世への志向がいちじるしい。そして最後に、四宮の地藏菩薩による地獄からの救済が述べられている。

このように、現世利益だけではなく、後生を語る意識が強い「稲荷大明神事」は、後生を願う仏事法会の場の目的に適切であったとも考えられるのである。

おわりに

ここまで確認してきたとおり、『神道集』『稲荷大明神事』は、いくつかの特徴を有している。まず、ダキニ法に関する聖教類と思想的な土壌を共有し、それを対句表現などの修辞を用いて構成していること。その際、中心の辰狐王菩薩と圍繞する眷属たちの尊容を列記することで、本尊画像を連想させるような叙述になっていること。さらに、現世の利益とともに後生の救済を強調していることの三点である。

こうした『神道集』の特徴は、法会の場に適したものだと考えられる。対句という修辞をほどこされた詞章は、表白や願文などの儀礼のテキストに通じるものであり、辰狐王菩薩と眷属たちの描写は、実際に本尊画像を前に読み上げられると、より効果的である。そして、現世にとどまらない稲荷神「ダキニ天」の功德は、法会の場で聴衆をつよく惹きつけるものとなるだろう。とくに、本地仏がい

かなる場所へもおもむき、その姿を変えて衆生を救済するという後生のくだりには、本地垂迹説に立脚した『神道集』の神仏のあり方が反映されている。

このように、『神道集』『稲荷大明神事』は、ややもすれば外法ともなり得るダキニ法とおなじ土壌に立脚しながら、それを『神道集』の神仏観にそわせ、仏事法会という儀礼の言辞に適したかたちで展開したものと考えられるのである。

以上、『神道集』『稲荷大明神事』から、『神道集』の性質と稲荷信仰の様相について考察してきた。『神道集』のなかでも難解な本地説が展開される章段は、これまで仏教思想を見い出す手がかりとしてあつかわれることが多く、文学研究の範疇から疎外されてきた感がある。だが、本稿で確認したとおり、そこには当時の信仰世界が鮮やかにうつつしだされており、儀礼の場のテキストとしての要素も見いだせる興味深いものである。それらへ目を向けたとき、本書が今後の宗教文芸研究に資するところは大きい。『神道集』『稲荷大明神事』は、稲荷信仰の多彩さをあらわすものであると同時に、仏事法会における神祇信仰の享受のあり方を垣間見せるものでもある。中世における神仏習合思想の展開のなかで、本書は多くの示唆をあたえるのである。

注

- (1) 近藤喜博「神道集について」、『神道集 東洋文庫本』角川書店、一九五九・二二、貴志正造「神道集」(東洋文庫、一九六七・七)、福田晃「神道集」とヨミの縁起唱導―原神道集の可能性―、『唱導文学研究』第一集、三弥井書店、一九九六・三二、同「神道縁起の表現」(『神話の中世』三弥井書店、一九九八・一)など。
- (2) 拙稿「神道集」と法会言説―本地説における表現形式の検討から―、『説話文学研究』46、二〇一・七、同「神道集」の世界―白山権現の王子たちをめぐって―(『中世文学と隣接諸学3 中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、二〇一・四)、『神道集』の詞章が表白や願文などに通じることは、福田晃「神道縁起の表現」(注―掲出論文)、同「真名本曾我物語の唱導の世界(上)」(『唱導文学研究』2、三弥井書店、一九九九・二)でも言及されている。
- (3) 「ダキニ」の表記は一定でないため、本稿では片仮名表記を用いる。漢字表記は各資料によった。
- (4) 『神道集』本文の引用は、赤木文庫旧蔵本(『神道大系 文学編 一 神道集』神道大系編纂会、一九八八・二)による。なお本稿では、引用文の訓点は引用元のままとし、句読点は私に付した。
- (5) 吉原浩人「大江正房と院政期の稲荷信仰(上)―伏見稲荷大社蔵「諸社効能」『稲荷』条の本地説をめぐって」(『朱』37、一九九四・三)など。
- (6) 『朱』編集部「稲荷神社社殿の沿革の問題―その他」(『朱』34別冊、一九九一・六)の本地一覧参照。ただし、『神道集』の本地説は「如意輪・地藏・千手」のみ掲載。
- (7) 「命婦」は稲荷神の眷属の雌狐。「命婦」については、近藤喜博「眷属とコメ」(『稲荷信仰』塙書房、一九七八・五)、大和岩雄「阿小町・小野小町とダキニ―稲荷信仰の一面」(『朱』36、一九九三・二)、
- 田中貴子「人はみな、稲荷へ向かう」(『解釈と鑑賞』58・3、一九九三・三)、阿部泰郎「道祖神と愛法神―敬愛の神々とその物語をめぐりて」(『湯屋の皇后』名古屋大学出版、一九九八・七)、大森恵子「愛法神・性愛神と稲荷信仰―特に、女狐と女性・神子を中心にして」(『山岳修験』25、二〇〇〇・三)参照。『稲荷大明神流記』二十二社并本地「稲荷一流大事」『稲荷山参籠記』などでは「命婦」の本地が文殊菩薩とされ、十四、十五世紀ころには同説が流布していたことがうかがえる。
- (8) 『神道集』において、稲荷明神は大日如来・普賢菩薩・多聞天・如意輪観音・阿弥陀如来・不動明王とも結びつけられているが、中心となるのは文殊菩薩である。なお、下社の本地とされた「如意輪観音」もまた辰狐と同体視された。山本ひろ子「異類と双身―中世王権をめぐる性のメタファー」(『変成譜』春秋社、一九九三・七)参照。
- (9) 近藤喜博「稲荷信仰」(注7 掲出書)、五来重「稲荷信仰と仏教―茶吉尼天を中心として」(五来重編「稲荷信仰の研究」山陽新聞社、一九八五・五)、高橋涉「稲荷と吒呌尼天」(『朱』31、一九八七・六)、松前健編「稲荷明神」(筑摩書房、一九八八・一〇)。
- (10) 「ダキニ法」については、阿部泰郎「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼」(『岩波講座東洋思想第16 日本思想2』岩波書店、一九八九・三)、同「道祖神と愛法神」(注7 掲出論文)、山本ひろ子「異類と双身」(注8 掲出論文)、田中貴子「外法と愛法の中世」(『外法と愛法の中世』平凡社、二〇〇六・三)、松本郁代「中世王権と即位灌頂」(森話社、二〇〇五・二)などの論考がある。ダキニ法は、『溪風拾葉集』巻三十八「多聞天秘決」に「吒天法者、急事出来時祈祷、速疾効験。然而畜類垂述体、故、愚痴法也」と記される「愚痴法」であった。
- (11) 柳田良洪「神道灌頂の展開」(『真言密教成立過程の研究』山喜房仏

書林、一九六四・八)。

- (12) 西岡芳文「式盤をまつる修法―聖天法式・頓成悉地法・ダキニ法」(『金沢文庫研究』318、二〇〇七・三)、『陰陽道×密教』(金沢文庫展示図録、二〇〇七・八)、および西岡氏による「総説」参照。なお、阿部泰郎「道祖神と愛法神」(注7掲出論文)、同「宝珠と王権」(注10掲出論文)によると、この盤法は、すでに保延五年(一一三九)写の仁和寺藏『多聞吒枳尼經』に確認できようである。
- (13) 『頓成悉地法事(付相承事)』によれば、ダキニ法は「最極秘密世習ヒ絶タル法」であり、かならず秘密裏におこない、たとえ妻子であっても知られてはいけないとされている。
- (14) 以下、称名寺藏・金沢文庫保管のダキニ天関連資料は、『陰陽道×密教』(注12掲出書)による。
- (15) 注8でも触れたように、『神道集』でもダキニ天と大日如来は結びつけられていた。また、阿部泰郎氏によれば、『多聞吒枳尼經』において、仏の前生の師である狐は、本地身が大日、現度身が文殊だとされているという。阿部泰郎「道祖神と愛法神」(注7掲出論文)。
- (16) 近藤喜博「稲荷詣の女たち」(『稲荷信仰』注7掲出書)、大和岩雄「阿小町・小野小町とダキニ」(注7掲出論文)、阿部泰郎「宝珠と王権」(注10掲出論文)、田中貴子「外法と愛法の中世」(注10掲出論文)、服藤早苗「女と男の出会い」(『平安朝の女と男―貴族と庶民の性と愛』中央公論社、一九九五・四)。
- (17) 拙稿『神道集』と法会言説(注2掲出論文)、同『神道集』の世界(注2掲出論文)。また、福田晃「神道縁起の表現」(注1掲出論文)、同「真名本曾我物語の唱導の世界(上)」(注2掲出論文)も参照のこと。
- (18) 法会の言説については、永井義憲「法会と唱導」(五来重編『講

座日本の民俗宗教7 民間宗教文芸』弘文堂、一九七九・一一)、阿部泰郎「唱導における説話―私案抄」(『説話と儀礼』説話・伝承学会、一九八六・四)、渡辺秀夫「願文の世界」(『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一・一)、小峯和明「中世法会文芸論」(笠間書院、二〇〇九・六)、『仏教文学講座第8 唱導の文学』(勉誠社、一九九五・三)など参照。なお、『神道集』の物語縁起における叙述には、類句列挙や三国列記、容貌・孤愁・恩愛の比喩などの修辭文例が認められる。それらもまた法会の言説に用いられる表現方法である。福田晃「真名本『曾我物語』の唱導的世界(下)」(『唱導文学研究』3、三弥井書店、二〇〇一・二)参照。

(19) 村上学「真字本曾我物語・神道集同文一覽」(角川源義『妙本寺本曾我物語』角川書店、一九六九・三)、同「真字本管理者についての一憶測」(『曾我物語の基礎的研究』風間書房、一九八四・二)、黒田彰「神道集、真名本曾我と平家打聞」(『中世説話の文学史的環境(正)』和泉書院、一九八七・一〇)、福田晃「真名本曾我物語・解説」(『真名本曾我物語』2、平凡社、一九八八・六)、同「真名本曾我物語の唱導的世界(上)」(注2掲出論文)など。

(20) 称名寺藏・金沢文庫保管『乙足神供祭文』『頓成悉地盤法次第』では、修法の際に眷属たちが招請されたことが確認できる。また、『溪風拾葉集』巻八十二「卍字秘決秘中極極」に四大王子、巻六十八「除障事」に八大童子、巻八十七「護法事」に二人の式神のことが記されている。

(21) 「四大王子」は『神道集』だけに見える呼称で、ダキニ法の聖教類では、天女子・赤女子・黒女子の「三女子」と「帝釈使者」とされている。『神道集』では、これをあわせて「四大王子」としている。

(22) 林温「吒枳尼天曼荼羅について」(『仏教藝術』17、一九九四・一一)、白原由起子「伏見稲荷曼陀羅」考―個人本「吒枳尼天曼荼羅」に対す

る異見」(『MUSEUM』60、一九九九・六)。

- (23) 山本ひろ子氏は、『神道集』を辰狐王曼荼羅という「イコン」に照応する本縁物語としている。山本ひろ子「異類と双身」(注8掲出論文)。称名寺蔵・金沢文庫保管『別行儀軌』もタキ二天の曼荼羅を、
「曼荼羅法、吒枳尼像画造二一手半、以三女子帝尺、圍繞、以二八大童子立二八方」と説明しており、『神道集』の記述を思わせる。なお、『神道集』の縁起類がもう説誦性について、大島由紀夫「神道集の縁起叙述」(『中世文学と隣接諸学』8 中世の神社縁起と参詣)竹林舎、二〇一三・五)で、巻二「熊野権現事」と熊野本地仏曼荼羅を例に指摘されている。

(24) 称名寺蔵・金沢文庫保管『吒枳尼法(秘)』、『頓成悉地法』、『頓成悉地盤法次第』など。

(25) 「什尊願文」(『陰陽道×密教』注12掲出書)。

(26) 巻五「宇都宮大明神事」も、おなじく観音・阿弥陀が本地である。

(27) 春日明神の一宮から四宮までの本地は、いっばんに「不空羅索(あるいは釈迦)・薬師・地藏・観音」の順であり、『神道集』の本地説は異質。

【付記】

本稿は、平成二十四年度学習院大学人文科学研究所若手研究者研究助成(研究課題「寺院資料調査に基づく中世宗教文芸の研究」)の給付を受けた研究成果の一部である。

ENGLISH SUMMARY

Textual representation in the *Shinto-shu* text "Inari-daimyōjin-no-koto":

On the acceptance of the Dakini faith

ARIGA Natsuki

This paper is a study of the ritual aspects of *Shinto-shu* (神道集) through investigation of the Dakini faith (タキ二天信仰) as it is presented in the *Shinto-shu* text "Inari-daimyōjin-no-koto" (稲荷大明神事).

Several characteristics are detected. First, this book reflects the notion of the Dakini-hou (タキ二法), which is a ritual of esoteric Buddhism, comprised of the rhetoric of antithetical phrases. Second, it implies Buddhist iconography, which was used in religious rituals, by describing the images of Shinko-ou-Bosatsu (辰狐王菩薩) and his followers. Third, it emphasizes the divine grace of this life and the relief to come after death. These findings remind us of *hyōbyaku* (表白) and *gannon* (願文), and the passage of Shinko-ou-Bosatsu and his followers would be truly impressive especially when they were read in front of Buddhist iconography.

To conclude, this text willingly accepts the elements of the Dakini faith in Buddhist rituals.

Key Words: *Shinto-shu*, Shinko-ou-Bosatsu, Inari faith, Dakini-hou, ritual text